

福光疎開学園日誌末巻

齋藤喜一

一. 日誌の冊数

- 第一輯 昭和三十年四月九日〜六月十一日
- 第二輯 六月十一日〜八月三十一日
- 第三輯 九月一日〜十月三十一日
- 第四輯 十一月一日〜十二月三十一日
- 第五輯 昭和三十一年一月一日〜三月八日

二. 動機

東京女高師附小は小平町の疎開してゐたので、空襲に代つて、艦砲射撃も用ゐるようになった。連日防空壕に入るといふありさまで、疎開にならなかつた状態と相成つた。そこで富山県福光に再疎開となり、四月九日希望の児童を連れて貨車でお送した。

私は東京女高師附小に赴任して二年目、いつの日かお集まりになるのが解らぬ状態であつて、この戦争が末期に成つていゝに肌を感して、この時がやま山や奥地への疎開は、おつてない体勢であるとも思ひ、こゝを先達り眼で記述しようとして書案を交した。それはおとさう感りなるとおもふ。そこで担任の三浦、三浦、それはおとさうの担任であつた川口、荒木、岩倉、上野、大坪、河野、古坂、重富、細瀬、本岡、三須、三橋、向笠、森、守口の十五名、齋藤喜一交代で毎日書くようにさせた。四六時中一語であり、学校生活の形をとお守りして、まよひなものであつた。書く時因と、まよひを因する時因の不足はなかつた。お集まりの指前を行つたことはほとんどない。唯一の作業といふことで、みんなは時因を可なり楽しんで書いてくれた。書く内容の指前を行つたことはほとんどない。お集まりの指前を行つたことはほとんどない。



此から三小は、五小をとりて「継進」の初卷の感想である。五  
小には当時の生活がリアルに描かれていまして、画などもよく  
よくと物濃く描いてある。

だが、先ず使われるというところから、又母を思ふ、生活の苦しみ  
訴えるという感情はかき入っているから知られない。また、当時の  
精神状況からいって、強がると言えるところがあるから、小が  
い。新むすびが十五歳、そこまで育つたことには驚くべきは  
いがない。しかし、素直な内心を伝達する信憑性を比べると  
懐疑は余りない。むしろおつんの子供ぶりかと思われ。新の  
感情がつけ加えられているのは、むしろ有り難いであらうであ  
らう。

2. 疎開中の全日数の記録は、訂正のついで見ると書き残す  
のと違う。昭和二十八年のうら。堀先生の「疎開の記録」  
をもとめられるというを、資料の収集を行つた。当然、この日誌  
に眼を留められ、保存してほしいというところもあつた。喜んで五  
冊全部を拝見し、先生を道へて提供。ところが出版の終了し  
ても「学童の疎開」昭和四年発行（おつんがりのうら）に  
上巻が、無くなるという事。もうどうしようもないので  
ところが数年後、三冊が手見つたという事。堀先生からもお  
まかせ。

昭和二十八年にうら。当時堀先生は七十五のおじい。その  
著者の「疎開」が著るといふこと、残りの二冊は、疎開  
のうらであった面からわかる。因にうらと見えては、  
色紙、色あはれりながらよく五冊が揃つて来た。以上が  
うらとうらの書影である。

昭和二十八年（一九八八年）一月 新巻  
進路の都合がかりにうらとうらとうらと。うらとうらと入  
かりねえうらと。うらとうらとに入らな。